

トキ節の時間的な特徴についての一考察(紀要編)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 由紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3419

トキ節の時間的な特徴についての一考察

加 藤 由紀子

要旨

従属節の中には、時間を表すトキ節がある。本稿では、意志的な動作動詞を述語として持つトキ節の複文のうち、一般的なトキ節の規則に従わないように見える文に注目して、どのような条件下でそのような文が成立するのかを観察した。

はじめに、トキ節の動詞として、移動動詞の「行く」「来る」を中心に挙げた。ここでは、トキ節が相対的テンスを取らず絶対的テンスになる場合、主節の動詞がトキ節の動詞の形をコントロールする場合、助詞がトキ節の動詞の形を限定する場合、主節の動詞の種類によってトキ節が意味する時間が異なってくる場合について考察した。

次に、意志的な動作動詞「作る」「着る」を取り上げた。ここでは、動詞のアスペクト的意味を考えた分類で同じグループに入っている動詞が、トキ節の中で同じ形をとる場合でも、時間的意味が異なってくるケースに注目して、動詞の意味・特徴との関係からその原因を考察した。

1. はじめに

「従属節としてのトキ ―初級におけるトキ節をめぐって―」(加藤 2003)の3.2.では、ルトキ、テイルトキ、タトキに注目して、動作動詞を述語に持つトキ節について考察した。しかし、そこで扱いきれなかった内容がいくつかあった。特に、時間関係においてトキ節の一般的な論理に従わないのに、文法的に適切である文の存在についてである。そこで、それらの例外的な文がどうして存在可能になるのかを観察した。その中で、同じ文型であっても、文全体を見ると、文法的に適切なものと、そうでないものがあることが分かった。さらに、このような違いが出て来る原因を考えたところ、動詞の意味的特徴に深く関係していることが予想された。

本稿では、これらのことを明らかにするため、基本的な動詞の意味的特徴を詳しく観察し、それらの動詞と文型との関係を分析することによって、この現象を考察していくことにする。

また、トキ節の中の意志的な動作動詞の意味・特徴が、動詞の形と時間に影響することに注目して、トキ節の表す時間が文全体に影響を及ぼす文と、その反対に、文全体の意味がトキ節の動詞の形に影響するような文の観察から、トキ節の従属複文の特徴を見ていくことにする。

2. 移動の動詞「行く」「来る」

2.1. 「行く」「来る」

2.1.1. 時間副詞

初級のテキストや文法書の記述には、多少異なる点が見られるものの、基本的には次のような説明がなされている。「行く時」の後件は、「行くという行動が始まる前」あるいは「現地に着く前」にすることやしたことを表す文となり、「行った時」の後件は、「行き着いた後」現地でしたことを表す文になる。また、トキ節がル形かタ形かは、後件との相対的な時間関係を表すだけであり、発

話時との時間関係は後件の文末に表れるというものである。

確かに、多くの文はこの説明で問題が出てこない。しかし、この説明に従わない文の存在がある。それは、次のような文である。

①来年そちらに行く時、家族の写真を見せます。

この例文は、はじめに示したような一般的な説明には当てはまらない。家族の写真を見せるのは、「そちらに行ってから」なのだから、説明に合わせると、次のような文にしなければならないことになる。

②来年そちらに行った時、家族の写真を見せます。

もちろん、一般的な説明にあてはまる例文②は適切な文である。それでは例文①は非文（非文法的な文）かということ、そうではない。では、これをどのように説明すればよいのであろうか。

また、すべての文が例文①のような文型で適切な文となるわけではない。むしろ文型だけをそのまま取り入れれば、非文になるものの方が多くなると考えられる。では、適切な文でありながら、初級の文法説明の例外になる文には、どのような条件があるのであろうか。（以下、*は非文であること、?は非文とは言えないまでも完全ではないと思える文を示す。）

*③そちらに行く時、（そちらで）家族の写真を見せます。

①来年そちらに行く時、（そちらで）家族の写真を見せます。

例文③と①の違いは「来年」があるかないかだけである。しかし、この違いが非文かそうでないかを分けるのであるから、この未来の時間を表す副詞があるかないかは文全体から見ると大きな違いとなる。例文③は未来を表すマーカ―が何もないために、「動詞ル形＋トキ節」本来の意味である「そちらに行き着く前」という意味になる。それゆえ、「家族の写真を見せる」場所が、相手のいる場所にはならない。そのために非文となるのである。逆に、例文①が文法的に適切な文となるのは、未来を表す副詞があるためである。つまり、文頭に付く「来年」という時間副詞が、その後に続く動詞の形を「未来を表す形になる」と予測させる要素となるのである。これは、述語が文末に来る日本語の特徴（加藤 2000）として挙げられるもので、結論が最後まで分からない言語の不安定さを解消するために、文末の予測を可能にする接続詞や副詞を積極的にとる現象である。（以下「当然の予測」と記す。）この日本語の特徴がここにも現れて、未来を表す時間の副詞が、トキ節としてはタ形となるべきところを、ル形でもよいと判断させるのである。つまり、この副詞の存在が、トキ節のテンスを絶対的テンスで表示することを可能にするのである。

それでは、この現象について、過去を表す副詞の場合で考えてみよう。

④この前旅行した時は A 旅行会社に頼んだが、この次（旅行する時）は B 旅行会社に頼む。

例文④の前半がこれに当たる。「A 旅行会社に頼んだ」のは旅行の前なのであるから、「この前旅行する時は」となるはずが、「この前」という過去を表す副詞が文頭に付くことで、その後に続く動詞がタ形をとっても、問題がなくなってしまうのである。

もちろん、例文④の前半のトキ節の動詞がル形をとることも可能である。しかし、この例文のように、文の前半が過去のことを表し、後半が未来のことを表している場合は、過去のことを表す前半をタ形、未来のことを表す後半をル形にする方がむしろ自然に感じられる。このように感じられるのは、絶対的な時間の対比を際立たせることが、文全体の意味を分かりやすいものにするからであろう。また、例文④には、時間の対比だけでなく、前半は A 社、後半は B 社という対比がある。このように、トキの対比と内容の対比があることも、絶対的な時間の対比を適切なものであると感

じさせるひとつの要因かもしれない。

次に、同じ内容を表現するとされている例文①と②の文の意味とニュアンスの違いを考えてみることにする。例文②の「来年そちらに行った時」は、「行く」という行動が完了した後で「写真を見せる」というように考えており、「そちらに行く」時の中をミクロ的視点でとらえている。これに対して、例文①は、マクロ的視点で「来年そちらに行く」という行動全体を、長い時の中のひとつの活動ととらえ、その時に「写真を見せる」と考えているニュアンスがある。そのため、例文①は、「そちらに行く」のは来年のことであるから、絶対的テンスである未来をとることが可能になるのである。それと同様の理由で、例文④の前半も、時の流れの中の過去のことを述べているのであるから過去形をとってもよいということになるのである。

このことに関して、工藤（2002）は、従属複文を分析する際には出来事間のシンタグマティックな時間関係そのものとしてのタクシスという要素を同時に考える必要があるとしている。さらに、トキ節については、「＜継起性—同時性＞のタクシスの対立は、従属文において、絶対的テンスの使用は可能かどうかとも決定すると思われる。……同時タクシスの場合には、次のように、絶対的テンス的使用が可能である。」（工藤 2002：227）と分析した。そのように絶対的テンスの使用が可能な場合として、以下のような例文を挙げている。（＝の記号の後に書かれている部分が、絶対的テンス的使用の例として示されているものである。）

・先月、ロシアに行く時は、シベリア鉄道を使った。

＝行った時は

・今度、うちの大学が発掘調査に行った時、その手伝いに行け。

＝行く時

これを見ても分かるように、絶対的テンスの使用を可能にするのは、「先月」「今度」のような時間副詞の存在である。これらの副詞があるので、「行く時」も「行った時」もニュアンスの違いはあれ、同様の内容を表すことができるのである。この副詞がなければ、「行く時」と「行った時」では、「シベリア鉄道を使った」場所も「手伝いに行く」場所も異なってくることになる。

2.1.2. 助詞によるトキ節の動詞の形の限定

加藤（2003）では、寺村秀雄、益岡隆志、塩入すみの3つの先行研究におけるトキ、トキハ、トキニハの違いについて議論した。今回は、塩入と中村ちどりの絶対的テンスに関する文法的視点を参考にして、「行く」「来る」という動詞との結びつきについて考えたい。

*⑤東京に行く時、新しい六本木のレストランに行きます。

?⑥東京に行く時に、新しい六本木のレストランに行きます。

⑦東京に行く時には、新しい六本木のレストランに行きます。

例文⑤は、未来を表す時間副詞がないので、通常のトキ節の相対的テンスの規則に従うことになる。そのため、東京に着く前に六本木のレストランには行けないということになり、非文となるのである。

例文⑥は、コンテキストが分からない一文レベルでは、どういう状況であるかが明確でないため、例文に?が付く。しかし、塩入（1998：545）がトキニについて述べたように、「特に一介の事態の発生を報告する場合、時を限定する場合にふさわしい。」と考えれば、「新しい六本木のレストランに行くのは、（未来のいつか）東京に行く時だ。」と考えることができ、絶対的テンスをとることが

できるようになる。このニュアンスがトキニにはあるため、一文レベルでも、非文であると言えない可能性が感じられるのである。

例文⑦はトキニハをとるため、「東京に行くときにはいつも、新しい六本木のレストランに行きます。」のような習慣性のある行動を表す文になる。これについては、塩入（1998：544）も、「一般的なきまり、対比、仮定条件を表す場合にふさわしい。」としているところである。

また、例文⑦のような文は、中村ちどり（2001：175）が、コンテキストから与えられるモダリティーを持つ文と呼んでいるものである。また、トキ節の複文におけるモダリティーとテンスの関係について、中村（2001：151）は、「モダリティー時点への制限を満たすために、絶対テンスを表すこともある」としている。これらをもとにして考えると、例文⑦の場合は、コンテキストから推量・意志のモダリティーが与えられている文であるため、絶対的テンスをとっても、文法的に適切な文になるのである。

以上の3つの例文から分かることは、主節のテンスが未来である場合で、トキ節の動詞が絶対的テンスのル形をとれるのは、トキニハを用いて習慣性のある行動を表す時のみであるということである。

なお、例文⑤⑥⑦のトキ節の動詞がタ形をとる時には、トキ、トキニ、トキニハのどの形をとっても、非文になるものはない。

2.1.3. 主節の動詞がトキ節の動詞の形をコントロールする場合

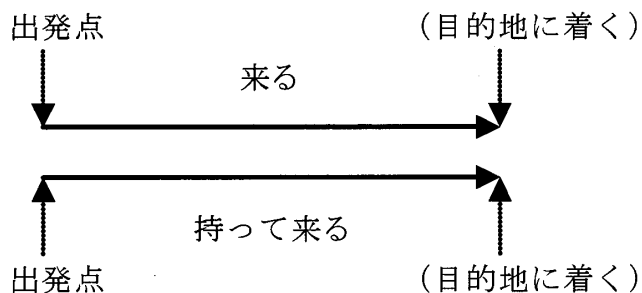
⑧この次来た時、家族の写真を見せます。

⑨この次来る時、家族の写真を見せます。

*⑩この次来た時、家族の写真を持って来ます。

⑪この次来る時、家族の写真を持って来ます。

例文⑧と⑨は、前の節ではほぼ同様の内容であるとした文と同じ形式の文である。しかし、これと同様に作った例文⑩⑪を見ると、例文⑩は非文になる。そこで例文⑧と⑩を比べてみると、文型は全く同じであるが、主文の動詞だけが違うことが分かる。では、どうして例文⑩だけが非文になるのであろうか。これは、例文⑧では、トキ節の動作主「私」が「ここに来る」という動作が完了した時に、「写真を見せる」という行動をするのに対して、例文⑩では、「ここに来る」という行動を完了する前から、「持って来る」という行動が始まっているからなのではないかと考える。それを図で示すと以下のようなになる。



つまり、主節の動詞が、「持って来る」のように、目的地に着く前から行動が始まる動詞の場合、トキ節の動詞は、例文⑪のように、「ここに来る」ことが未完了であることを意味するル形をとらなければ、タイミング的に不都合が生じることになるのである。ここから分かることは、主節のテンスがトキ節の動詞の形をコントロールするだけでなく、主節の動詞自体がトキ節の動詞のテンスをコントロールすることがあるということである。これは、トキ節の動作主と主節の動作主が異なっても、「来る」という動作が完了する前に主節の動作／行為が始まっていることが明らかであれば、同様である。

*⑫この次来た時、父も来ます。

⑬この次来る時、父も来ます。

例文⑫が非文になるのも、例文⑩と同様に、トキ節の動作主「私」が「ここに来る」という行動を完了する前から、主節の動作主「父」が家を出発してここに来るという行動が始まっているからなのである。

このような現象が起こるのは、主節の動詞が「行く」「来る」の場合、あるいは「連れて行く／来る」「持って行く／来る」「運んで行く／来る」「作って行く／来る」のような、「～て行く」「～て来る」の形をとる複合語の動詞で、その動作がトキ節の動作の完了以前から始まっていることが分かる場合である。

2.1.4. タ時とテイル／テイタ時

加藤（2003）は、トキ節と主節の動作主が同一の場合、日常的な場所に「行った／来た＋トキ」の主節には、日常的な内容やそこですることが目的となっている内容を表す動詞が来ることはなく、非日常的なことをするような動詞しかこないことを明らかにした。また、トキ節の動作主が日常的な場所に「行った／来た＋トキ」の主節には、トキ節の動作主に対して非日常的なことが起こったというような動詞しか来ないことを明らかにした。しかし、主節の動詞で表される内容が起こるタイミングについては言及しなかった。ここでは、そのことについて考察したい。

（以下のふたつの例文の動作主は、インドに住んでいないことを前提としている。）

⑭インドに行った時、地震があった。

⑮インドに行っている時、地震があった。

＝行っていた時

例文⑭と⑮では、ニュアンスの違いがあるとは言え、意味的な違いはほとんどない。しかし、次の例文には違いがある。

⑯会社に行った時、地震があった。

⑰会社に行っている時、地震があった。

＝行っていた時

上のふたつの文を見て分かるように、地震が起こった時期が、例文⑯では、「会社についてすぐに起こった」ことを意味するのに対して、例文⑰では「会社にいた時間のどこかで起こった」ことを表すという違いがある。これは、移動した先が日常的な場所か、非日常的な場所であるかによって、主節の内容がいつ行われたか、いつ起こったかを規定することを示している。つまり、まとめると次のようになる。

1) 日常的な場所に「行った時」「来た時」＋非日常的な行動／出来事 A

・・・ A は「行ったすぐ」「来たすぐ」の行動／出来事

2) 非日常的な場所に「行った時」「来た時」＋非日常的な行動／出来事 B

・・・ B は「行っている時」「来ている時」のどこかでした行動／起こった出来事

2.2. その他の移動の動詞

2.2.1. 「戻る」

「帰る」と「戻る」は、どちらも意志的な移動の動詞であり「もとに戻る」意味を持つ帰着の動詞である。そのため、ニュアンスの違いはあっても、「国に帰る」と「国に戻る」が、ほぼ同じ意味として使われることがある。また、アスペクトとテンスを考えに入れても、動詞としては同じグループに分類されている。

⑮国に帰っている時、幼友達が会いに来た。

⑯国に戻っている時、幼友達が会いに来た。

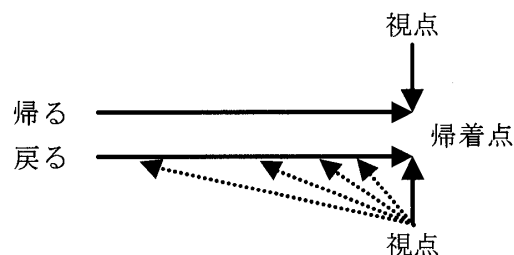
寺村（1998：115-116）は、このふたつの動詞について、「『帰る』と『戻る』は似ているが、『戻る』が、単に移動の始点と終点と同じというだけであるのに対して、『帰る』は、主体の属しているところに再び移動するという点で異なる。」と述べている。確かにこの点は異なるが、上の例文などは、意味的にほとんど変わらないと言ってもよいであろう。これを、ルトキ、タトキ、テイタトキのどれに換えても、同様の結果が得られる。

それでは、同じようにテイルトキを使った以下の例文はどうであろうか。

⑰味方の陣地に帰っている時、敵から攻撃された。

⑱味方の陣地に戻っている時、敵から攻撃された。

例文⑰では、「敵に攻撃された」のは「味方の陣地内」であると考えられる。これに対して、例文⑱では、「敵に攻撃された」のは「味方の陣地内」とも考えられるが、「陣地に戻る途中」とも考えられる。これは、「帰る」は帰着点に視点があるのに対して、「戻る」の場合は、帰着点だけでなく、そこに至るまでのことも視野に入っているという意味特徴があるからなのではないかと考える。このイメージを図にすると、以下のようになるであろう。



また、「行く」「来る」を考えると、「行っている時」「来ている時」というのは、「帰る」と同様に、その途中を全く表さないことが分かる。このことについて、寺村（1988：115）は、「行く」「来る」「帰る」が「本来的には、話し手が発話時にいる場所、または話し手がふだんいる場所、属しているところ（まとめて「自分の領域」と呼ぶ）が、出発点、到達点として言わなくても了解されている点が共通している。」と述べている。これに対して、「戻る」には「自分の領域」という意識がないか、あるいはそのような領域意識が希薄であることが、この違いになるのではないかと考える。

つまり、同じ移動の動詞でしかも同じ動詞の形をとる場合でも、時間的意味に違いが出るのは、語の意味・特徴に結びついている面があると言える。

2.2.2. 「集まる」

「集まる」は、「来る」と同様に、意志的な移動を表す動詞であり、場合によっては「来る」と同じような状況を表す動詞になる。例えば、「学生は 9 時に教室に集まる。」「学生は 9 時に教室に来る。」というような文である。

㉔ 学生が教室に来ていた時、地震が起こった。

㉕ 学生が教室に集まっている時、地震が起きた。

以上のふたつの例文を見ると、例文㉔は、「地震が起こった」のは「すべての学生が教室に来てから」であるが、例文㉕は、「すべての学生が教室に集まってから」のことかもしれないし、「学生が教室に集まりつつある時」のことであるかもしれないという違いがあることが分かる。

これは、「来る」の場合も「集まる」の場合も、移動の終点に視点がある移動の動詞であることには変わりがないが、「来る」の動作主は単数でも複数でも成立する動詞であるのに対して、「集まる」の動作主は複数でなければならないためである。つまり、「集まる」という動作をする集団の中のひとりの学生を取り上げれば、「学校に来る」という点的な意味になるが、それが集団となれば、集まってくる「時」にずれがあるために、点の集合としての線的な意味を持つことになるのである。このことは、点的な動詞「死ぬ」で、動作主が単数である時には、「死んでいる」が「死んだ後の状態」を表すのに対して、動作主が複数である時には、「人々が死んでいる」が「死んだ後の状態」と表すことも、「次々に死んでいっている状態」を表すこともあるということと同様である。

では、ここでもう少し例文㉔の「来る」について考えてみよう。「集まる」との比較で、「来る」の動作主は、単数である場合も複数である場合もあると述べた。それでは例文㉔の動作主は単数かという、この例文では複数であると考えの方が妥当であろう。それなら、なぜ「来る」は「集まる」のように、点の集合で線的になるという理論が成立しないのであろうか。これは 2.2.1. で述べたように、「来る」が帰着点の意識が強い動詞であるためであろう。それゆえ、「学生が教室に来ていた時」だけでは、点の集合で線的であると認識するには不十分な表現になるのである。どうしても線的認識ができる文にしようとするれば、「次々に学生が教室に来ていた時」のように、それが明確に認識されるような副詞の存在が必要となる。

3. その他の動詞

3.1. 「作る」

加藤（2003）は、「ごはんを食べる時、箸を使う。」が適切な文になり、「ごはんを食べている時、箸を使う。」という文が適切でなくなるのはなぜかについて考察し、以下のようにまとめた。

トキ節の動詞も主節の動詞も線的な動詞であり、どちらもル形である場合は、トキ節と主節は同時進行することを意味する「仮定条件／習慣・きまり」の文になる。

また、これは主節の動詞が点的な動詞である場合には、それが「習慣・きまり」を表す文であっても、主節の内容はトキ節の事柄以前のことになるということにも言及し、以下の例文を挙げた。

㉖ ごはんを食べる時、冷蔵庫からバターを出す。

この例文㉖の「ごはんを食べる時」は「ごはんを食べる前」を表しているのであって、「ごはん

を食べる時、箸を使う。」の「ごはんを食べる時」とは意味が異なることについて述べた。本稿では、さらに以下の例文を例文②④と比較したい。

②⑤ごはんを食べる時に、冷蔵庫からバターを出した。

≠食べている時に

②⑥ケーキを作る時に、オーブンでやけどした。

=作っている時に

トキ節の動詞「食べる」と「作る」は線的な動詞であり、主節の動詞「出す」と「やけどする」は点的な動詞である。しかし、例文②⑥の「作る」はテイルに置き換えが対して、例文②⑤の「食べる」は置き換えが対しない。また、「作る」は、その作業の最中の意味になるが、「食べる」は、その動作の前のことになる。このような意味の違いが対て来るのは、トキ節の動詞に意味的性質の違があるからである。つまり、「食べる」は、食べはじめた瞬間から完全にその動作の状態になっているの対して、「作る」は、「作る」という作業が始まっても、「作った」という段階になるまでは、ケーキを作る「過程」があるためである。それゆえ、「食べる時」は「食べはじめる前」ということになり、「作る時」は「作っているところであるが、できあがっていない時」になるのである。

しかし、必ずしも「作る」は「作っている時」を意味するわけではない。

②⑦ケーキを作る時、まず材料を買いに行った。

これは、通常の「ル形＋トキ」で表される一般的な解釈「ケーキを作る前」を表している。この例文②⑥と②⑦を比較すると、トキ節の中の動詞の形は同じであっても、主節の内容がトキ節の内容の「前」なのか「その途中」なのかを、文の内容から自然に判断していることが分かる。これも、「当然の予測」があるからだと言えよう。

また、例文②⑥は「作った時」とすることもできる。

②⑧ケーキを作った時、オーブンでやけどした。

これは、「オーブンでやけどした」時は、「ケーキを作っている時」であるにもかかわらず、主節の動詞がタ形であることに影響されて、2.1.1. で述べたように、絶対的テンスになったものと考えられる。

「作る」のような動きをする動詞は、「建てる」「こしらえる」「築く」のような生産的な動詞だけでなく、工藤（2002：73-74）が動詞の分類で、外的動作動詞・主体動作・客体変化動詞として挙げている中の、「客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞」も、同様の動きをする。そのリストの一部を挙げると以下の通りである。

もようがえ動詞：あたためる、かたづける、かわかす、なおす、まとめる等

とりつけ動詞：いれる、かくす、かさねる、かざる、つなぐ、はる、まぜる等

とりはずし動詞：ちぎる、とる、ぬく、のける、はずす、はぐ、はなす等

うつしかえ動詞：あげる、あつめる、うつす、とどける、はこぶ、よせる等

生産動詞：（先に挙げた通り）

上記のような動詞が、「ル形＋トキ」の形をとり、主節の動詞がタ形をとる文では、例文②⑥で示したように、ルをテイルに換えることが可能になる。

しかし、これらの動詞でも、ルがテイルに置き換えられない場合がある。

②⑨ケーキを作る時、電話が鳴った。

この例文で電話が鳴ったのは、「ケーキを作る前」であり、「作っている時」ではない。このように例文②⑥と②⑨で違いが出るのは、例文②⑥の「ケーキを作る」と「オープンでやけどする」の間には関連性があるのに対して、例文②⑨の「ケーキを作る」と「電話が鳴る」の間には、そのような関連性がないため、「当然の予測」の範囲を越えてしまうためであると考えられる。

3.2. 「着る」

③⑩着物を着る時、母に来てもらった。

③⑪着物を着る時、母に着せてもらった。

上のふたつの例文は、どれもトキ節の動詞に「着る」を使っている。しかし、例文③⑩で、「母が来る」のは、着物を着る前である。また、例文③⑪で「母が（着物を）着せる」のは、着物を着ている過程すべてを通してである。

そのような違いが出てくるのは、トキ節の動詞が「作る」と同様に、「着る」という行動を始めてから「着た」に至るまでの過程があるからであると考えられる。しかし、この結論を出す前に、例文②⑥の主節は「やけどする」という点的な動詞であるのに対して、例文③⑪の場合は「着せる」という線的な動詞であるという違いがあるので、同じ条件の文で、「作る」の場合と同じであるかどうか確かめてみることにする。

③⑫着物を着る時、ひもで爪を傷めた。

=着ている時、

例文③⑫を見ると分かるように、この例文は例文②⑥と同様であると言える。つまり、「着る」も「作る」と同様に、着る「過程」があるため、その過程の中で、主節の「ひもで爪を傷めた」という事態が起こると考えられる。

しかし、「着る」と「作る」には、異なる点もある。

③⑬着物を着ている時、写真を撮ってもらった。

③⑭ケーキを作っている時、写真を撮ってもらった。

例文③⑬は、「写真を撮ってもらった」のは、「着物を着ている途中だ」と考えることもできるが、「着物を着た後」としても考えることもできる。「当然の予測」に従えば、むしろ後者であると考えられる場合が普通であろう。これに対して、例文③⑭は、「ケーキを作っている途中」としか考えられない。このような違いが出てくるのも、動詞の意味的な特徴が異なることが原因である。

身にまとう物の脱着を表す再帰動詞は、「今日、田中さんはワンピースを着ている」で表されるような結果の継続と、「田中さんは、今鏡の前でワンピースを着ている」で表されるように動作の継続という、ふたつの意味的側面を持っている。これに対して、「作る」は動作の継続の意味しかない。これが、例文③⑬と③⑭の違いが出る原因である。

4. まとめ

トキ節の中の動詞の種類とその形が、文の中でどういう意味になるか、あるいはその反対に、文全体の意味がトキ節の動詞の形にどのような影響を及ぼすかについて観察したことをまとめると、以下ようになる。

1) トキ節の中のテンスは、主節に対する相対的テンスであると基本的には考えられているが、

時間副詞がある場合、時間的対比を明確にしたい場合、時間を限定する助詞（二ハ）が付く場合には、絶対的テンスに換えられる、あるいは換えた方がより好ましい場合もある。

- 2) 主節の動詞が、「行く」「来る」あるいは「連れて行く」「連れて来る」のような「～て行く」「～て来る」という複合語である場合には、それらの動詞の始まりが、トキ節の「行く」「来る」という動詞の完了時点以前であるため、トキ節の中はル形（「行く時」「来る時」）しかとれない。
- 3) 非日常的な所に行った場合は、「行った時」の主節は、その場所にいる間のどの時点のことも表すことができる。これに対して、日常的な所に行った場合は、「行った時」の主節は、「そこに着いた直後」の事柄しか表せない。
- 4) 意志的な移動・帰着の動詞「戻る」は、「帰る」に近い意味を持っているが、「帰っている時」が「帰り着いた後」のことを表すのに対して、「戻っている時」は「戻った後」だけでなく「戻っている途中」も表す。このことは、「帰る」が「行く」「来る」同様、そこに着くまでの過程ではなく帰着点に視点がある動詞であるのに対して、「戻る」の場合は、帰着点に視点があるだけでなく、その過程にも視点がある動詞であるということを表している。
- 5) 「集まる」は、動作主が複数でなければならない動詞であるため、個々が集合地点に来る時間にずれが出る。そのために、個々の到着という点の集合が線的になるという現象が起こり、「集まっている時」は「集まった後」だけでなく「集まっている過程」も表す。
- 6) 「作る」のように、完成までの過程がある動詞は、ルトキで、「動作の前」も「動作の間」も表す。しかし、主節の動詞がトキ節の内容との関連性がない場合には、「動作の前」の意味にしかない。
- 7) 「着る」のように、身にまとう物の脱着を表す再帰動詞は、結果の継続と動作の継続の意味を持つため、ルトキがその「動作の前」も「動作の間」も表す。またテイルトキが「動作の間」だけでなく「動作完了の後」も表す。
- 8) 前件と後件の関連が明確である場合には、「当然の予測」がなされ、必ずしも相対的テンスをとる必要はないが、関連が見出せない場合は、「当然の予測」ができないため、相対的テンスをとる。

以上のことから、明らかになったのは、まず、動詞の意味・特徴によって、～ルトキ、～テイルトキ、～タトキ、～テイタトキの表す「時の意味」が変わることである。工藤（2002）は、アスペクト対立の観点から、かなり細かく動詞を分類しているが、それに従っても、同じグループに分類されている動詞が、トキ節の従属複文の中で、同じ時間的な意味にならない場合があることが分かった。つまりそれは、分類よりもさらに細かい動詞の意味・特徴の違いが、トキ節の時間的意味に影響を与えているためであるということが明らかになった。また、動詞のこのような特徴に加えて、まとめ 8) で示したように、「当然の予測」が働くことが、テンスに大きな影響を与えることが分かった。このような視点は、今まで、トキ節の複文を考える時には見逃されていたところである。しかし、従属節複文を考える時には、このような細かい点こそが肝心であると考えられる。

本稿では、トキ節内の動詞に注目して従属複文を観察したので、主節の動詞の種類や意味・特徴の観察は、トキ節の内容にかかわるもののみにとどめた。しかし、さらに従属複文を考えていくためには、トキ節の動詞と主節の動詞との関係を考えていく必要があるであろう。また、工藤（2002）が指摘するように、複文を考える時には、単語・文だけでなく、テキストとの関係を考えていくことも重

要であると考ええる。そのような内容を視野に入れて、全体的に考えていくことが今後の課題である。

参考文献

- 加藤由紀子（2000）「＜せっかく～のに＞文の誤用とその背景」『岐阜大学留学生センター紀要』岐阜大学留学生センター
- 加藤由紀子（2003）「従属節としてのトキ ―初級におけるトキ節をめぐって―」『岐阜大学留学生センター紀要』岐阜大学留学生センター
- 工藤真由美（2002）『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
- 塩入すみ（1998）「トキとトキニとトキ（ニ）ハ」『日本語類儀表現の文法 下』くろしろ出版
- 寺村秀夫（1988）『日本語のシンタックスと意味 I』くろしお出版
- （1999）『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版
- 中村ちどり（2001）『日本語の時間的表現』くろしお出版